様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 25 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５９２３６４
研究課題名（和文）

子どもの入院と親の養育行動の変容－養育支援のためのアセスメントツールの開発－

研究課題名（英文）The transformation in parental behavior among mother with hospitalized children.

研究代表者
草場　ヒフミ（KUSABA　HIFUMI）
宮崎大学・医学部・教授

研究成果の概要：本研究からは以下のことが明らかになった

入院している幼児に付き添う親の入院に伴う養育行動の変容過程を明らかにし、支援方法を検討することを目的に、1 週間以上の付き添い経験のある母親および小児看護経験のある看護師への面接調査をおこなった。母親の養育行動には、子どもを見守る、心地のよくする、療養が守れるようにする、日常生活の中に療養を組み入れることが抽出され、入院時期とのあいだに関連があった。養育行動の変容には、子どもの状態と行動の変化の受け入れ、療養環境への母親の適応が関与していた。

交付額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2006 年度 | 1,400,000 | 0 | 1,400,000 |
| 2007 年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2008 年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 3,100,000 | 510,000 | 3,610,000 |

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学
キーワード：看護学　　養育行動　　親　　入院　　幼児

## １．研究開始当初の背景

子どもが最善の医療を受けるためには，親の医療への参加は不可欠である。しかし，入院児の親に見られる養育不安や自信喪失などの養育行動の混乱，抑うつ反応，自己効力の低下，身体的不調などは，親がその役割を果たすことの困難さを示している。入院児の親は，家庭において日常的に発達させてきた養育行動を，子どもの健康状態や医療環境にそって変化させることが求められる。これは，健康な子どもの育児が困難とされる近年の

育児環境において，困難な課題となっている。子どもの健康回復にとって、家庭－病院－家庭（療養）という環境移行のなかで，適切な養育を受けることは非常に重要であり，親の養育行動の変容を支援・促進する方法の開発は強く求められている。

２．研究の目的

幼児の入院における親の養育行動の変容および関連要因を明らかにし，看護援助に向けてのアセスメントツールの試作を目的とする。

(1)幼児の入院による親の養育行動の変容を明らかにする。(2)幼児の入院による親の養育行動の変容に影響する要因を明らかにする。(3)上記に対する親の困難を明らかにする。(4)上記に過程における看護ニーズと看護ケアを明らかにする。(5)入院児への親の養育行動支援のためのアセスメントツールを試作する。

３．研究の方法

(1)子どもの入院における親の行動変容に関する文献の検討

関連する書籍および国内外の文献検索（PubMed、CINAHL、医学中央雑誌）を通して、既存の研究の方法および結果の分析をおこなった。

(2) 幼児期に入院した子どもを持つ母親への面接とその分析

対象；入院した幼児（２歳から入学前）を持ち、その子どもの付添を経験した母親；①子どもが入院中、②退院後。入院期間は10日間以上とした。面接内容：入院生活において、入院児の日常性の世話やしつけなどの養育において戸惑いや困ったこと、どのようにして今の世話の仕方を見に付けたのかなど。データ収集と分析：面接内容は許可を得てICレコーダーに録音した。分析は質的帰納的方法を用いた。倫理的配慮：研究の趣旨と内容、プライバシーの確保、参加による利益・不利益、研究への参加は自由意思であることなどを、口頭と書面を用いて説明し、了承を得た。

(3)入院している幼児を看護した経験を持つ看護師への面接とその分析

対象；母親が付き添って入院している幼児（２歳から入学前）の看護の経験のある看護師。小児の看護の経験は３年以上とした。面接と内容：入院中の幼児の母親が子どもの世話やしつけなどの養育において、戸惑いや困っていること。その母親に、支援をしたり、配慮したり、気をつけていることなど。データ収集と分析：面接内容は許可を得てICレコーダーに録音した。分析は質的帰納的方法を用いた。倫理的配慮：研究の趣旨と内容、プライバシーの確保、参加による利益・不利益、研究への参加は自由意思であることなどを、口頭と書面を用いて説明し、了承を得た。

(4)母親の面接結果と看護師への面接結果から、養育行動支援を検討した。

４．研究成果

(1) 文献研究の結果

わが国における慢性疾患児を養育している母親の療養生活支援行動、養育態度は疾患の種類、病状の程度、親の病気認知との関連が報告されている。子どもの病気・入院（環境移行）という状況において、母親は役割の変化を認識していた。役割の変化には、①付き添っている入院児への役割と、入院前に果たしていた役割との調整、②入院児への役割変化（養育行動の獲得）の２つの側面があった。役割行動の変化に影響する要因としては、疾患の種類・病状、家族からのサポート、病児との関係、医療者からの支援、病気・病状・治療への認識があった。

(2)入院している幼児に付き添う母親の養育行動の変容

子どもの入院において母親は、生命の危機であるという思いと罪悪感の中で付き添いを始めていた。母親の養育行動は入院期間、

子ども健康状態、子どもとの関係、病院環境への慣れ、病気・治療の理解、に影響され、＜子どもを見守る＞＜心地よくする＞＜療養を守るようにする＞＜日常生活のなかに療養を組み入れる＞が抽出された。子どもとの関係には、子どもの身体状況に戸惑う、療養に伴う子どもの言動の変化に戸惑うがあった。同時に、母親は、自身の入院環境への適応、子どもの入院以前に培っていた家族や仕事の役割との調整を必要としていた。家族などのソーシャルサポートは、養育行動への変容に影響していた。

①子どもを見守る

入院当初の診察・検査・治療が行われ、医療機器を装着してベッドにいる子どもの様子を“自分の子なのに、半分は自分の子の身体ではないような”と戸惑い、自分の手の内から離れているという不安と子どもにどうしてよいかわからない、何もできない無力感表現していた。母親は病状と変化、検査・治療について、医療者に尋ねるとともに、自分で確認できる手だてを探し確認しようとしていた。ベッド上に臥床してる子どもの傍にいて、“そばを離れられない”“少しでも離れたくない”と語り、子どもの治療や医療者の関わり、子どもの病状の変化、眠れているかなど、子どもに行われている治療を理解しようとしていた。また、子どもが治療を妨げる行為をとっていないか等、安全について目配りし守ることを行っていた。入院治療の場と時間、子どもの行動、治療についての予測が出来ないことから、母親は強い緊張の中で過ごしていた。

②子どもを心地よくする

病状が安定し、周囲が少し見慣れたものになると、子どもは酸素吸入や持続点滴などの治療が継続されている中でも、行動を広げようとする。母親は子どもの動きたいなどの求めに応じたいという気持ちを、「辛い治療を受けがまんしているので、出来るだけ楽にしてあげたい」「泣かないで気持ちよく過ごすことは子どもの回復によい」と語り、自分のできる方法を探して、子どのニーズを満たすように受容的に関わりたいと考えていた。母親は看護師と一緒に行う子どものケアをとおして、“こうすれば抱っこできる”“点滴していても起きて遊ぶことができる”“ベッド上で髪が洗える”など、治療中は出来ないと思っていたことが出来ることに気づき、母親が養育行動を広げていくきっかけや資源となっていた。この時期、“いつもの子”“もうしばらく入院生活が続くから”など、入院生活における日常性が表現された。

③療養を守るようにする

継続される治療は子どもの生活時間の中に組み込まれ、一定の生活リズムが生まれる。この時期、子どもとの間に対立や葛藤を体験していた。

「子どもの変化への戸惑い」

薬や治療の強い拒否、医療者、母親、同室児等への攻撃的言動、母親への甘えや依存、など、家庭や入院初期には見られなった言動に、我が子像の変化、親役割を果たせない苦しさが表現された。

「療養を守らせることへの葛藤」

この時期、療養を守らせる行為が、時に子どもを受け止めること、あるいは思いを察し叶えることとの間の葛藤として表現された。子どもとの一体感への脅かしとしてとらえていることもあった。

④日常生活の中に療養を組み入れる

治療や予防にかかわる生活行動を、“家に帰っても続けなければならないこと”と、子育ての一つのあり様として表現された。これには、子どもの変化への母親の適応と子どもの日常性への気づきが見られた。

子どもの抵抗する行動を、“ベッドの柵をあげようとすると上げないでと私の手を押さえます”“おとなが舐めても苦いから”“自分で痛くないように試みてる”と子どもの視点から捉え、子どもが“がまん”や“頑張っている”状況が表現された。治療や薬の影響、ストレス下にある子どもとの理解などをとおして、気になる子どもの行動に巻き込まれていた状況から、行動の意味の捉え直しは子どもへの関わりへの変化のきっかけになっていた。

(3)看護師が実践している看護支援

看護師は、子どもの病状の安定、よく眠るなど日常生活のリズムが整うと、親も情緒的に安定してくるなど、親が養育に戸惑っている事と養育行動をとるようになる時期を予測していた。

① 親の生活の安定をはかる

母親は子どもの病気・入院に情緒的混乱があること、入院生活環境への戸惑いがあることを前提として関わっていた。病院においてケア体制をが整えることは、どの時期においても、母親への支援として語られた。

② 子どもと親との関係を損なわない

子どもと親との間に強い緊張関係が生まれることが語られ、それは時に両者に危機となることをおそれ、予防的に関わることが大切であると認識されていた。

③ 母親の養育方針を尊重する

母親の養育行動が、看護師やチームの考えや方針と異なることがあった場合、親の養育方針を尊重することが重視されていた。

④ 援助の方法を一緒に探す

子どもが治療や検査を受け入れやすくするための方法、行動制限に伴う日常生活の不便さ解消するための工夫が、情報の提供とともになされていた。

⑤ 子どもの行動の意味を話し合う

依存が強くなる、攻撃的な行動が増える、退行的な行動など、家庭とは異なる子どもの言動への戸惑いがある。母親に薬の影響、行動制限のストレスなど子どもの行動の意味を説明することや話し合いがなされていた。

(4)アセスメントツールに向けて

入院児に付き添う母親の養育行動の変容は、親役割の混乱から母親が病気の子どもの養育を自分のものとして受け入れ獲得していく過程をとして見いだせた。親役割の遂行を困難にしている要因には、子どもの身体的変化、検査・治療・療養と子どもの反応、療養環境、医療者と関係、家庭における役割と病児の親として役割の調整であった。時間経過の中で、母親は日々の体験を積み重ねる中で、入院前の養育を確認することや見直しすることを行い、病気の子どもの親としての養育行動を獲得していた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

**６．研究組織**

(1)研究代表者
草場　ヒフミ（KUSABA　HIFUMI）
宮崎大学・医学部・教授
研究者番号：30153280
(2)研究分担者
野間口　千香穂
（NOMAGUCHI CHIKAHO）
宮崎大学・医学部・准教授
研究者番号：40237871
藤井　加那子（FUJII KANAKO）
宮崎大学・医学部・助教
研究者番号：30404403